

報 告

就学前児をもつ外国人母親の社会的ネットワークと
子育てに対するソーシャルサポート山中 早苗¹⁾, 中村 安秀²⁾

〔論文要旨〕

本研究は、就学前児をもつ外国人母親の社会的ネットワークと子育てに対するソーシャルサポートを明らかにすることを目的にインタビュー調査を実施した。回答者のネットワークは同国人との関係が主体であるケースが多かった。日本人とのつながりは子育て支援・就学前教育サービスを通じ促進されていたが、言語文化的差異の存在や、外国人と接した経験の乏しい日本人との関係がストレスを生んでいた。そのため、互いが打ち解け合える機会の設定や、地域内での組織的な交流の場が重視されている。社会的ネットワークから子育ての実質的なサポートを得ることは難しく、子育て負担感の軽減には他の社会サービスと連携した支援が必要だと考えられた。

Key words : 外国人, 母親, 社会的ネットワーク, ソーシャルサポート, 就学前教育サービス

I. はじめに

日本における登録外国人は1980年代後半より大幅に増加し、2010年末には213万人と総人口の1.7%を占めている¹⁾。登録外国人の滞在の長期化と定住化は家族の呼び寄せや国際結婚の増加につながり、外国人家庭への支援の重要性が小児保健の分野でも指摘されてきた²⁾。言語や文化的背景が異なる地への移住は心理的ストレスを伴うため、新しい環境への適応には社会的ネットワークの構築とそこから得られるソーシャルサポートが重要な役割を果たす³⁾。社会的ネットワークは個人が持つ他者との関係性であり⁴⁾、親しい人との強い紐帯だけでなく、知り合いとの弱い紐帯の重要性が指摘されている⁵⁾。また、子育て中の母親にとって重要なソーシャルサポートとして、道具的サポート(子どもの世話)、情動的サポート(子育て情報)、情緒的サポート(悩み相談)、評価的サポート(子育て観の

肯定)、コンパニオンシップ(おしゃべり)といった分類がなされている⁶⁾。家族や親族だけでなく、友人や他の母親から得られるソーシャルサポートは母親の育児ストレスを軽減させる重要な働きをしている⁷⁾。しかし、海外生活では母親が同国人とのつき合いに閉じ込められがちになること⁸⁾、育児の負担から家庭内で孤独な状態に置かれること⁹⁾が報告されている。

子どもの発達は家族を取り巻くネットワークに大きく影響を受けるため¹⁰⁾、子育てに主要な役割を果たす母親が社会的ネットワークを介して必要なソーシャルサポートにアクセスすることは、母親本人にとどまらず子どものより良い発達にとって非常に重要である。就学前教育サービスは親同士の相互関係を促進し、家族に必要な社会関係資本をもたらしと言われる¹¹⁾。しかし、外国人母親の社会的ネットワークとそこから得られるソーシャルサポートが子育てに及ぼす影響について言及した研究は非常に少ない。本研究では子育て

Social Networks of Immigrant Mothers with Preschool-aged Children and Social Support for Child Rearing [2434]

Sanae YAMANAKA, Yasuhide NAKAMURA

1) 大阪大学大学院人間科学研究科(学生/保育士)

2) 大阪大学大学院人間科学研究科(研究職/医師)

別刷請求先: 山中早苗 大阪大学大学院人間科学研究科 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-2

Tel/Fax: 06-6879-8064

受付 12. 5.21

採用 12.12.10

支援および就学前教育サービスを利用している外国人の母親に焦点を当て、これらのサービスが社会的ネットワーク形成にどの程度役立っているのか、また社会的ネットワークから子育てに必要ななどのようなソーシャルサポートを獲得しているのかを明らかにすることを目的とした。

II. 方 法

1. 調査地および調査対象者の概要

調査は多文化共生社会の実現に向けた取り組みを積極的に実践している大阪府 A 市で実施した。対象となった外国人の母親は、20歳を過ぎてから来日し、1年以上日本に住み続け、就学前年齢の子どもを1人以上もつ者とした。調査フィールドとして子育て支援サービス（A 市国際交流協会が実施する「外国人・日本人母子交流プログラム」）と就学前教育サービス（保育所および幼稚園）を選定し、これらサービスのいずれかを利用している母親を調査対象とした。A 市国際交流協会の外国人・日本人母子交流プログラムは、子育て中の日本人女性がボランティアとして参加し、ピアサポーターの役割を担いながらプログラム内容の立案と実施を行う。活動は週1回2時間で、手芸や料理、おしゃべりなどを通して交流する子育てサークルと類似した活動を行っていた。対象者への接触は、国際交流協会と教育委員会から紹介を受けた保育所および幼稚園を介して行われた。最終的に A 市内に在住する母親8名と、国際交流協会の外国人スタッフで兵庫県 B 市の保育所を利用している母親1名の合計9名が調査対象となった。

2. 調査方法

2009年2月から4月にかけて、9名の外国人母親に対して半構造化個別インタビュー調査を実施した。社会的ネットワーク構築にあたっての経験とネットワークに対する認識を詳細に理解するため、質的調査方法の一つであるインタビュー調査を採用した。質問項目は、(1) 属性、(2) 移住後の困難、(3) 社会的ネットワークの規模と構築機会、(4) 社会的ネットワーク構築に対する阻害要素、(5) 社会的ネットワークから得られるソーシャルサポートを設定した。インタビューは国際交流協会または対象者の家庭において、日本語または英語で実施した。インタビュー時間は最短期が43分、最長期が103分であり、平均69分にわたった。結果分

析はインタビューの録音を逐語にてテープ起こしを実施し、回答内容をカテゴリー化しながら表にまとめた。カテゴリー化に際しては、質問紙の内容に沿って項目ごとに回答を整理し、各項目内で話された内容をさらにテーマに沿って分類し、共通点や相違点、各項目間の関連性について検討しながら分析をすすめた。

3. 倫理的配慮

研究にあたっては大阪大学人間科学研究科の倫理委員会より承認を受けた。調査対象者には研究内容の説明および研究への参加協力を依頼する文書を母国語に翻訳したものを提示した。研究への参加は任意であり途中で参加をとりやめることが可能であること、学会等での発表においては個人が特定されないよう細心の注意が払われることを伝え、同意書への署名をもって調査への参加とインタビュー内容の録音について承諾を得た。

III. 結 果

1. 回答者属性（表1）

回答者の出身国は韓国が3名、フィリピンが2名、タイ、中国、インドネシア、ロシアが1名ずつであり、年齢は30代または40代であった。日本での滞在年数は最短期が2年、最長期が14年（平均滞在年数7年）となっていた。すべての回答者が夫と子どもからなる核家族を形成しており、日常的に接触できるような親族を母国から同伴している者はいなかった。仕事を持っている者は9名中2名で、残り7名は専業主婦である。日本語の意思疎通力については、「問題なし」または「よくできる」と答えた者が5名、「ある程度できる」と回答した者が2名、「少しできる」が2名となっていた。調査時に利用していた主要な子育て支援および就学前教育サービスは、国際交流協会の外国人・日本人母子交流プログラムが3名、保育所が2名、幼稚園が4名であったが、過去に異なるサービスを利用したことのある者や、新しいサービスへの移行期にある者がいた。また、地域 NPO が主催する外国人子育てサロン、児童館、地域の子育て支援センター、保育所開放も利用したことのある子育て支援プログラムとして挙げられた。

2. 移住後の困難

来日後の困難について尋ねたところ、言葉の問題、社会的ネットワークの欠如による問題が挙げられた。

表1 回答者属性

回答者コード	出身国	年齢	滞在年数	来日理由	今後の滞在	夫の出身国	子どもの数と年齢	職業	日本語力	子育て支援・就学前教育サービスの利用
母親1	韓国	30代	9年	結婚	永住	日本	2人 (4歳, 7歳)	専業主婦	よくできる	協会プログラム→幼稚園, 保育所
母親2	タイ	30代	2年	夫の仕事	永住	日本	1人 (3歳)	専業主婦	少しできる	協会プログラム→幼稚園
母親3	中国	30代	4年	結婚	永住	日本	1人 (1歳)	専業主婦	ある程度できる	協会プログラム, 子育て支援センター, 保育所開放
母親4	インドネシア	30代	3年	夫の仕事	帰国	インドネシア	2人 (2歳, 5歳)	介護職	ある程度できる	保育所, NPO 子育てサロン(過去)
母親5	韓国	40代	14年	就学	未定	韓国	1人 (3歳)	学生・講師	問題なし	保育所
母親6	ロシア	40代	13年	仕事	永住	日本	2人 (6歳, 9歳)	専業主婦	問題なし	幼稚園, 児童館(過去)
母親7	フィリピン	30代	9年	子どもの教育	永住	日本	2人 (5歳, 15歳)	専業主婦	問題なし	幼稚園
母親8	フィリピン	30代	4年	夫の仕事	帰国	フィリピン	1人 (5歳)	専業主婦	少しできる	幼稚園, 保育所(過去)
母親9	韓国	30代	5年	夫の仕事	未定	韓国	2人 (4歳, 5歳)	専業主婦	問題なし	幼稚園, NPO 子育てサロン

言葉の問題は日本語が理解できず、近所づき合いに消極的になった経験や子どもが病気になった時のストレスが語られた。また、日本語での会話に問題を感じなくなっただけでも読み書きに対する不自由さは残り、幼稚園からの手紙が読めずに準備物が遅れるなど、子育て面にも影響が及んでいた。社会的ネットワークの欠如は孤独感や寂しさを引き起こし、日本での生活に必要な情報を教えてくれる人がいない不便さにつながっていた。

3. 社会的ネットワークの規模と構築機会

回答者の持つ社会的ネットワークの規模を把握するため、家族以外の「親しい人」と「知り合い程度の人」の数を尋ねた。その結果、親しい人の数は3～8人(平均5人)であり、全ての回答者が少なくとも1人の日本人と親しい関係を築いていた。知り合いの数は「たくさんいる」という回答が多く、その数を明確に把握することができなかったが、親しい人や知り合いと共にする行動、同国人と日本人との関係の違いについて回答者が語った内容から判断すると、同国人との関係に比重のある者が多かった。

社会的ネットワーク構築の機会は、親しい人および知り合いとどのように出会ったかを尋ねた。その結果、(1) 子育て支援・就学前教育サービス、(2) 教育機会(日本語学習の場や大学)、(3) 他者からの紹介、(4) 近隣での出会い、(5) 同国人の集まり、(6) 教会、(7)

職場の7種類が挙げられた。子育て支援・就学前教育サービスは、同年齢の子どもをもつ他の母親との社会的ネットワークを形成する有効な場となっており、特に外国人と日本人の両方を対象とした国際交流協会、地域NPOによる子育て支援サービスは、ボランティアとして活動をサポートしている日本人と知り合うきっかけをもたらししていた。保育所や幼稚園では「子どもの友だちの保護者と親しくなった」という意見が聞かれ、子どもの交友関係が、母親の社会的ネットワークに影響を与えていることがうかがえた。日本語があまり話せない母親も、幼稚園で英語の話せる日本人保護者と関係を築いており、保育所では委員会活動に参加することで気の合う日本人に出会えたという回答が聞かれた。

日本語学習の場は外国人同士のつながりや日本語を教える日本人との社会的ネットワーク作りに役立っており、教会は同国出身者とのつながりを促進する場として同国人コミュニティと類似した働きを持っていた。また夫や家族から紹介されたホストファミリーや友人は移住後すぐの段階において生活を確立する大きな助けとなっており、その後も関係が維持される傾向にあった。一方、職場でのネットワークは仕事上の関係にとどまり、個人的な関係には発展しにくいという意見が聞かれた。さらに、子どもが乳児期に近所の公園で出会った母親同士が同じ幼稚園を利用することでより親交が深まる、親しい友人から別の友人の紹介を受ける

表2 社会的ネットワーク構築に対する阻害要素

(1) 言葉の問題

- ・子育てセンター行ったら、寂しい感じ。日本人バーバーと（速いスピードで）しゃべる。私は見るだけで、会話とか入ることができません。だから深い交流ができないですね。（母親3）

(2) 日本人側の経験不足

- ・（幼稚園の）地域ミーティングがあって、自己紹介をしたら奇妙な視線を感じました。とても変な目で見られたり、私の方を見ないようにしていたり。ほとんどの人が外国人に慣れていないようで、そのグループに入っていくのはとても難しいと思いました。（母親2）

(3) 文化的差異

- ・文化もそうなんです。誘う時に「誘っていいかなー」と思うし、こんな親しさで誘う？みたい。同じ韓国人のお母さんだったら、「今日家来て」みたいに、ほんとに気軽に誘うことができるんだけど。幼稚園の（日本人のお母さんにはそれができないですね。（母親9）

(4) 地理的距離

- ・1年間留学生会館に住んでた時に、上の階の人とその隣の人とすごく仲良くなって、その人達が（母国に）帰るときに、号泣したんですよ。それ以来私も「日本に住む時はあんまり心開いちゃダメだな」と思ったんですね。（母親9）

(5) 移住背景の違い

- ・ジェラシーすごいもん。例えば私はいい生活してるとか。私が仕事してないじゃないですか。それでもちょっとだけファッションもできる。向こう（他の同国人）はほとんど働いてる。皆日本（での生活が）長いのに、格好もまだフィリピンにいるみたい。ちょっと違う雰囲気とか、スタイルとかうらやましい（という目で見られる）。（母親7）

(6) 忙しさによる時間的制限

- ・毎日家から保育所に子どもを送り届けてパートタイムの仕事に行きます。仕事から戻ってきて子どもを迎えに行くと、家に帰る。朝から夜までこれだけです。他の人と会えるのは土曜日か日曜日だけ。インドネシア人とは電話かメールでやりとりして、月に1回みんなで会うくらいです。（母親4）

(7) 内向的な性格

- ・私はあまり社交的ではありません。一人でいることや、少数の友人しかいないことが気になりません。・・・夫の同僚が集まるフィリピン人のパーティーに出かけ、「こんにちは」とあいさつしますが、それだけです。彼らと心を通わせるための努力をしないんです。（母親8）

など、1つの機会が他の機会へとつながるなかでネットワークが強まったり拡大したりする面が見られた。

4. 社会的ネットワーク構築に対する阻害要素（表2）

社会的ネットワーク構築に際しては、(1) 言葉の問題、(2) 日本人側の経験不足、(3) 文化的差異、(4) 地理的距離、(5) 移住背景の違い、(6) 忙しさによる

時間的制限、(7) 内向的な性格が阻害要素になると回答者は感じていた。言葉の問題は、言いたいことが十分に表現できないもどかしさや日本人の母親集団の中に入っていく際の疎外感として認識されていた。幼稚園利用者のなかには「日本人の母親グループに入ると無視された」という苦い経験を語った母親がおり、外国人と接した経験の乏しい日本人との交流に消極的になっていた。また、はっきり意見を言わない日本的なコミュニケーションや他者との距離のとり方に対するとまどいが、文化的な差異として認識されていた。この他にも、近所に同じ幼稚園を利用している家族がいない、親しくなった同国人が母国に帰国し疎遠になるという距離的な問題が挙げられた。また、移住背景の違いにより経済的格差や生活スタイルに差が生じ、同国人同士の嫉妬感情へとつながることも、同国人との関係作りを阻む要素となっていた。さらに、すぐに人とは打ち解けられない内向的な性格、保育所を利用する母親から聞かれた「育児と仕事の両立に忙しく、他者と交流する時間が持てない」という時間的制約も、社会的ネットワーク構築を妨げると考えられていた。

5. 社会的ネットワークから得られるソーシャルサポート

回答者の多くは生活のうえで夫を第一の相談者だと感じていたが、友人や知り合いからも子育てに必要なさまざまなサポートを得ていた。まず、交際的サポートとして、誕生日や正月を一緒に祝う、家に遊びに来てもらうというような経験が語られた。さらに子育ての気がかりや日々の生活について共有する相手を持つことが情緒的サポートにつながっていた。道具的サポートとしては、幼稚園などから配布される日本語書類の翻訳や病院での通訳といった内容が挙げられた。また、保育所や幼稚園を決める際の情報や、子育てに必要な物品の購入先を教えてもらうというような他者からのアドバイスが情動的サポートとして得られていた。物質的サポートとして日本語の童謡CDや幼稚園の制服をもらうといった経験が語られた。さらに、他の同国人母子とのネットワークは子どもの母語習得をサポートするものとして重視されていた。他者から得られるソーシャルサポートはさまざまな側面で子育てに役立っている一方、子どもの面倒をみてもらうというような直接的な道具的サポートを家族以外の者から得られている母親は非常に少なかった。夫が仕事に忙しい母親のなかには、「母国に帰れば子育てを手伝っ

てくれる人がいるから、いつも帰りたいと思っている」と子育て負担感を募らせている者がいた。

IV. 考 察

1. 外国人母親の社会的ネットワークの特徴

本研究の対象となった外国人母親は、来日直後には夫しか、または誰一人知っている人がおらず、社会的ネットワークの再構築を迫られている。そのため多くの母親が社会的ネットワークの欠如に伴う寂しさや孤独感、生活に必要な情報の不足を感じていた。回答者の社会的ネットワークはさまざまな機会への参加を通じ再構築されていたが、同国人との関係が主体となっている者が多かった。一方、日本人との関係は子育て支援サービスや就学前教育サービスへの参加により促進されていた。

回答者の社会的ネットワークが同国人との関係を主体とするものになることが多くなったのは、日本語学習、同国人同士の集まる場、教会など、同国人（または他の外国人）との接触をもたらし場への参加が多かったことが理由の一つだと考えられる。実際に、回答者の多くが共通して参加していたのが日本語学習の場であった。調査地である大阪府 A 市の国際交流協会では母子交流プログラム以外にも日本語学習など、外国人に対するさまざまなサービスが包括的に提供されている。協会の日本語学習を利用したことで、母子交流プログラムの存在を知り、併せて参加するようになった者もいたことから、地域内で外国人が集うことのできる組織的な場は社会的ネットワーク形成に大きな影響をもたらすと考えられた。同国人よりも日本人との関係に比重を置いていた母親は、来日後すぐに家族の紹介で日本人と親しくなり、同国人とは距離を置きながら日本語を習得し、その後も頻繁に日本人と個人的接触を持っていた。このことから、日本人とのネットワークは日常的に日本人と接触できる環境的特性だけでなく、日本人と積極的に関わり合おうとする姿勢、日本語力など個人の持つ特性からも影響を受けると考えられた。

また、回答者は他の母親との関係が必要だと感じ、母親同士が交流できる場に参加することでネットワークを広げていた。特に幼稚園就園年齢以前の子どもを同伴して日本に来た回答者は、子どもと一緒に参加しながら友だち作りができるような場所を強く求め、国際交流協会の母子交流プログラムを利用しており、そ

こでピアサポーターとして活動に参加している日本人とのつながりを得ていた。行政が主催する子育て支援を目的としたプログラム（例えば子育て支援センター）や、任意で設立される子育てサークルは地域に多く存在するが、実際にこのようなサービスを利用した回答者は、日本語力の不足から母親グループに入っていくことが難しいと述べている。このような観点からも、外国人を対象とした子育て支援の取り組みは、低年齢の子どもをもち、日本での生活に十分なじめていない専業主婦の母親にとって、地域で子育てをしている他の母親と知り合う貴重な機会を提供していたといえる。

2. 子育てに重要なソーシャルサポート

社会的ネットワークから得られる子育てサポートのなかでも、交際的サポート、情緒的サポート、実質的な子育ての手助けという道具的サポートは、主に親しい人とのつながりから得られていた。母親の幸福感が情緒的サポートや交際的サポートと関連していること¹²⁾、自分の思いを打ち明けられる友人の存在が育児ストレスの軽減につながること⁷⁾は先行研究からも指摘されている。母国を離れて子育てをする外国人の母親にとって、一緒に出かけたり子育ての気がかりを共有できる親しい相手がいることは、精神的健康の向上にあたり重要な意味を持つと考えられた。一方、情理的サポートは知り合い程度の関係にある人からも有効に引き出されていた。親しい人とのつながりは閉鎖的であり、互いに同じような情報や資源しか共有されないが、知り合いとの関係を介してはその個人が持っていない資源にアクセスすることを可能にする^{5,13)}。情理的サポートとして、保育所や幼稚園を選択する際の情報を日本人の知り合いから得たという回答が聞かれたが、教育システムの違いなどから、外国人の母親はこのような選択に日本人以上に不安を覚えることは容易に予測できる。日本語力の高い母親は、年上の子どもをもつ日本人の知り合いに積極的にアドバイスを求めており、それほど親しくない日本人との関係から十分な情理的サポートがもたらされていた。

しかしこの研究では、子育ての実質的な手助けを家族以外の者から得ていた母親が非常に少なかった。子どもの年齢が低いと子育てに手がかかるが、夫からのサポートが十分ではなく、他に子育てを手伝ってくれる人もいない母親は、子育て負担感と相まって手伝っ

てくれる親族のいる母国に帰りたいという感情が強まっており、子育て負担感とホームシックの二重のストレスを抱えていた。低年齢児をもつ外国人の母親に対しては、家庭内で十分な子育てサポートが得られていない場合、保育所の一時預かりといった社会サービスの存在を知らせるなど、地域の子育て資源を有効に利用するための方策も必要となると考えられた。

3. 社会的ネットワークの促進にむけて

社会的ネットワークを促進させる要素を回答者の発言から読み解き整理すると、(1) 類似性、(2) 接触頻度・時間の多さ、(3) 近接性、(4) 信頼、(5) 機会参加への動機づけの5つが抽出できた。類似性は、年齢の近い子どもをもっていることや同じ言語、文化を理解できることなどが含まれる。子どもを出産後、同じ時期に出産したそれまで知り合い程度だった人と非常に親しくなったと話した母親もあり、子どもの存在を介して母親同士の社会的ネットワークが深まる可能性が示唆された。日本人女性の社会的ネットワークの研究では、学生時代や職場の友人との関係が出産後は他の母親とのネットワークに置き換えられるという指摘¹⁴⁾があり、子どもの存在が互いを結ぶより重要な共通点として作用し始めることが示唆されていると言える。

接触頻度・時間の多さは頻繁に交流する機会を持つことや、長い時間を共に過ごすことがそれに当たる。これは、保護者同士の接触が少ない保育所での委員会活動への参加が、日本人保護者との親しい関係をもたらしたという回答者のコメントから裏付けられた。近接性とは互いに物理的に近い環境に置かれていることを指す。引っ越しや帰国が他者と疎遠になるという経験を回答者は持っており、互いの家が近いことで頻繁に行き来をして関係を深めたケースもあったことから、近接性は社会的ネットワークを促進させる影響をもたらすと考えられた。

信頼とは、他者に紹介された人とのネットワーク作りに関わる要素である。Aの紹介によりB、Cの二者が接触する場合、A—B間、A—C間にはすでに信頼関係が成立しており、この信頼を通してBとCは互いに打ち解けやすくなると考えられる。家族から紹介された日本人とは強い結びつきが築けていたことから、紹介によるネットワークに介在する信頼という要素は、言葉や文化の違いを超えて人を結びつける可能性があると考えられた。機会参加への動機づけは、日

本語学習や外国人を対象とした子育て支援サービスのようにより、外国人が気軽に参加でき、参加によるメリットがあると感じられるような活動がその例である。特に日本人と外国人が接触する場では、参加者の興味を満たすプログラムを検討し、実施することで互いの社会的ネットワーク促進につながる可能性があると考えられた。

4. 本研究の限界と今後の展望

本研究の限界として、大阪府下の一つの市における少数の外国人母親を対象とした調査であるため、結果の一般化が難しいことが挙げられる。また、社会的ネットワークの規模に関する量的な分析もできていない。しかし、外国人の母親の経験をもとに質的分析を掘り下げたことに意義があったと考える。今後は今回得られた知見をもとに外国人母親を対象とした量的調査を行い、社会的ネットワーク構築の機会とネットワーク阻害要素、促進要素の関連を検証する必要があると考える。

V. 結 語

外国人母親の社会的ネットワークは同国人主体となる場合が多かったが、日本人との関係は子育て支援・就学前教育サービスの利用を通じて促進されていた。しかし、言語文化的差異が存在し、外国人と接した経験に乏しい日本人とのつき合いにストレスを感じていた。そのため、外国人と日本人が楽しみながらじっくり交流できるような機会や、外国人の母親同士が集えるような場を設定することが重要となっている。また、社会的ネットワークから子育ての実質的サポートを得ることは難しく、母親の子育て負担感を軽減させるために保育所一時預かりなど既存の社会サービスと連携した支援が必要であると考えられた。

謝 辞

本研究のインタビューに回答して下さった外国人母親9名には心より感謝いたします。A市国際交流協会、教育委員会をはじめ、調査時には公立保育所および幼稚園からも多くのご協力をいただきました。また、オーストラリア・メルボルン大学のRosalind Hurworth准教授には、研究の実施とデータ分析にあたり多大なるご指導をいただいたことを深謝いたします。

文 献

- 1) 総務省. 出入国管理. 2011. website available at http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri06_00017.html. Accessed 23 April, 2012
- 2) 李 節子. 多民族文化社会における小児保健の課題. 小児保健研究 2004 ; 63 (増刊) : 115-117.
- 3) Hernández-Plaza S, Alonso-Morillejo E, Pozo-Muñoz C. Social Support Interventions in Migrant Populations. British Journal of Social Works 2006 ; 36 : 1151-1169.
- 4) Fischer CS. To Dwell among Friends: Personal Networks in Towns and City. Chicago : The University Chicago Press, 1982.
- 5) Granovetter M. The Strength of Weak Ties. The American Journal of Sociology 1973 ; 78 : 1360-1380.
- 6) 加藤孝士. 養育者への重要な他者からのサポートと内的作業モデルの関連. 発達心理学研究 2007 ; 18 : 185-195.
- 7) 小川佳代, 榮 玲子, 野口純子, 他. 地域子育て支援事業の効果に関する研究—母親の親性の発達に影響する要因—. 小児保健研究 2010 ; 69 : 432-437.
- 8) 清水嘉子. 海外在留邦人の育児ストレス—ブラジル (サンパウロ)・中国 (北京) から—. 小児保健研究 2004 ; 63 : 506-515.
- 9) Gold S. Gender, Class, and Network: Social Structure and Migration Pattern among Transnational Israelis, Global Networks 2001 ; 1 : 57-78.
- 10) Cochran M, Brassard J. Child Development and Personal Social Networks, Child Development 1979 ; 50 : 601-616.
- 11) Talay-Ongan A, Ap EA. Child Development and Teaching Young Children. South Victoria : Thomson Social Science Press, 2005.
- 12) 加藤孝士. 母親の主観的幸福感とソーシャルサポートの関係. 小児保健研究 2008 ; 67 : 57-62.
- 13) Portes A. Social Capital: Its Origins and Applications in Modern Sociology. Annual Review of Sociology 1998 ; 24 : 1-24.
- 14) 實川慎子. 子育て期の母親の友人ネットワークの変遷: 母親の捉える「知り合い」と「友だち」に注目して. 乳幼児教育学研究 2010 ; 19 : 37-47.

[Summary]

The purpose of this research is to investigate how immigrant mothers with young children develop their social networks outside the home and types of social support available through these networks. Semi-structured individual interviews with nine immigrant mothers who utilised early childhood services were conducted.

This study revealed that many respondents developed social networks mainly with compatriots, as their networks were formed by attending Japanese classes, social gatherings with compatriots or churches. Also many respondents needed to establish social networks with other mothers, and social networks with fellow peers, including Japanese mothers, were facilitated through participating in early childhood services. However, some mothers had difficulties in interacting with Japanese due to language and cultural barriers and uncomfortable attitudes directed from Japanese who see foreigners as strangers because of a lack of personal contact with them. Therefore, the establishment of opportunities where both immigrants and Japanese can interact and understand with each other were considered necessary. This study revealed that five factors such as similarity, regular exposure, proximity, trust and incentives could be associated with the opportunities to support the development of social networks of immigrant mothers.

The research further suggested that a variety of social support for child rearing in emotional, practical, informational and material areas were accessed through social networks. Networks with peer mothers of the same nationality were valued to learn the way of teaching the child the mother tongue. However, it is pointed out that accessing to practical child care support through social networks was difficult. Thus, when an immigrant mother feels a lack of support for her child care, it is essential to link the mother to other social services such as occasional care provided at a nursery school in order to alleviate her difficulties.

[Key words]

immigrant, mothers, social networks, social support, early childhood services